



幼児教育の反省

堀内 康 人

どんな分野でもそうでしょうが、こと幼児教育の分野においても、なんとたくさんな矛盾した問題があることでしよう。そうした問題が、お互いからみ合っているの、それを解きほぐすだけで日が暮れてしまい、一つの問題が片付いたと思えば、また次の問題が出てくるといった有様で、幼児教育の現場は目のまわるようなないそがしさです。

けれども、そうした目のまわるようなないそがしさの中にあつて、幼児教育にたずさわっている人たちは、その楽しさと苦しさを味わいつつ、日一日とその大切な事に目覚め、大勢としては、確信をもって幼児教育をおし進める方向にむかっているようです。でも、まだまだ幼児教育に対する無理解が各方面に残っている為、いろいろな矛盾が、いろいろな形であらわれてまいります。

ところで、よく考えてみますとそうした無理解は、決して幼児教

育にたずさわる保育者以外の問題だときめるのにはまだまだ早いようですし、私たちは人を責める前に私どもの中にあるそれを発見し、その克服をきびしくやっつけていかねばならないと思います。

そこで私は、いざやこの子らに生きん、と確信をもって幼児教育の仕事に励んでいらっしやるかたから、おしかりを受けることを覚悟しながら、幼児保育者自身にある、幼児教育に対する無理解、反省の無さをつまみ出してみようと思ふのです。そして私は私なりに、もしそうしたものが保育者自身によって克服されたならば、その時は、見違えるようなすばらしい成果が現われるとおもっています。

まず次のようなことを克服したいと思います。若いかたがたがあちこちで、さかんに、「仕事はとつてもつらいが」などと歌って氣勢をあげているようですが、果して流れる汗に未来をこめて仕事

に打込んでいるかどうか、仕事というもののきびしさを体全体でうけとめているのかと疑わしくなることがしばしばあるのです。

それも、近代機械工業のコンベエヤシステムの中で、オートメーションのメカニズムの中で瞬時といえども手ははずされず意識の集中を怠ることの出来ない労働者などは、実感をもってそう歌えるのでしようが、なにをいうか、先ほどは目のまわるようないそがしさといったではないかとおっしゃるかもしれません。たしかに幼児を保育している時間内の目のまわるようないそがしさを否定するわけではありませんし、その疲労度の測定の結果も出ているようですが、特に保育者にいわれることは、子どもを帰したあとのお互のおしゃべりを、なんとかならないものかと感ぜられるのです。こうしたおしゃべりをお互に許しておりますと、自然時間をとられますので、それが次の保育に対する手を抜く結果をもたらすようです。ただでさえ保育の仕事は、やろうと思えば、どれほど時間があっても足りないほどたくさん準備、それこそ温く、きめ細かい、ゆきとどいた準備が必要なのですが、それがおしゃべりのため中断されたり、おそくなったからやめておきましょうという悪い結果をまねくようです。仕事をこぎばきと、思いついたらその場で、決しておっくうがらずに、しかも根気強くということは保育者として備えなければならぬ性格的条件だと思ふのですが、女の人特有のおしゃべりという魔物が飛出してわざわざいしている

ような面が多いように思われるのです。結局こうしたおしゃべりの問題は、仕事と取組む構えを、保育者のおかれたそれぞれの条件の中で確立する問題と関連づけられるのではないのでしょうか。

次に私どもが克服しなければならないものとして、私どもの中にある、目新しい物にとびつく傾向、そしてこれ見よ方式があると思うのです。どうも世の中全体が、次から次へ目新しいものを、これみよがしという風潮になっておりますので、そうした影響が幼児教育の世界にもおしよせていることは確かです。そうしたものが主体性が確立しない所におしよせますと、変な権威追従となつて、鼻もちならぬ光景を展開するようです。どこかでこんな新しい事をはじめた、それ真似してやってみよう、ではただそれだけの結果しか現われなれないというのが、実は幼児教育のきびしさなのですが、どうも目新しい、見栄えのするものを取入れようとおせつて結局それが子どもたちの生活の中で脈うって流れていない事がしばしば目につきます。保育研究会などでつかわれた新しい保育教材が、遊び室の片隅におし込められて埃をかぶって眠っていたり、研究会でやられた事は、ただその時の「見せよう」で終り、どこを眺めまわしても見当らないなどというのではなきけないことです。新しいものがすべて悪いものではないのですが、それを無計画に、幼児教育の全体計画の中に正しく位置づけもしないで持込むのでは、いたずらに混乱を招くようなものです。こ

んなことをやっておりますと、いつの間にか型通りが一番無難だ
というような消極主義におち込んでしまうようです。

次に子どもが克服しなければならぬこととして、私どもは
たずらに子どもたちのあれこれの現象を追いかけてまわして、その
セクレタリーになり下ってはいないだろうか、ということですよ。お
宅のお子様はこんなだったんですよ、誰それちゃんがどうしてこ
うしてということも、いわなくてはならない時は仕方がないでし
ょうが、ただそれだけでは誠に頼りない話で、それを何らかの形で
系統的に整理して示すことが出来るようにしなければいけないよ
うに思われます。単なる話題の提供者では、決して科学的保育者
にはなれないのです。しかしこれはなかなかむずかしいことで、
決して幼児保育に当る人たちだけでなく、教育学、心理学をやる
人も一しょになって、そうした事が出来るようにする為の方法を
考えていかねばなりません。ただ心理学者の考案したテストをや
って、こんなふうでしたでは話になりません。こうした保育の仕
方によって、こんな結果が、このような過程を経て出て来た、そ
れがこの面においてはこう、他の面においてはこう、というふう
に出来るようになってはじめて、保育ということが科学という軌
道にのることになります。ところが保育者の中には、子ども
の示すいろいろな現象を、心理学者が考え出したような抽象的概
念で手際よく説明して、あたかも本質的なことをいっているよう

な錯覚におち入っている人がまだまだたくさんあるような気がし
ます。私どもは常に結果を示そうとあせらないで、過程を明きら
かにしつつかおしゃべりする習慣を身につけないといけないよう
に思います。子どもたちのどんな行動でも意味のないものは一つも
ないので、それは皆まった原因によっておこってくるので
すから、保育者は一定の教育的意図によって、子どもたちに教育
的働きかけをする場合に、それを系統的に、明確に、順序正しく、
単純なものから複雑なものへと、もっとわかり易くいきますと、
イが済んだらロへ、ロが済んだらハへという具合にやるのです
が、それがなかなかむずかしいので、つい時にはイロハが済まない
うちに二を与えたり、ニとロをこちゃこちゃに与えたりするので、
そうした働きかけの結果までごちゃごちゃになって現われてくる
わけで、それでは子どもたちの行動を過程的に明きらかにするこ
とも出来ないでおわり、結局結果を既成概念でただ説明するより
他にないということになってしまいます。こうしたことを考えて
まいりますと、実際保育に当たっている時よりも、明日の保育はどう
しようか、あの子はこうだったから明日はこんな物をこんなふう
に、前の全体保育の時はあのようにやったら、あんな結果だった
から、今度はこのようにやってみようというように、保育者が頭
の中を整理し、頭の中で準備することが大切になります。そして、
そうした準備をしっかりとしたりしたならば実際やる段になって、偶然的

なものが飛出しても計画をかえないでやる強きをもたなければならぬと思うのです。手際よき、気転がよくきく、こともたしかに保育者には必要かもしれませんが、それよりも少々手さばきは悪いが、一旦しっかりと立てた計画は、その場になってぐらぐら変えないでやってしまい、その結果をきちんと整理し、次の計画には、その時出てきたような偶然的なものが飛出さないような保育の仕方を考えるということが極めて大切だと考えるようになりました。そうはいくもの実際保育に当って、それこそしゃくしじょうぎは、なかなか出来ないということはよくわかるのですが、教育計画というのは偶然的なものが飛出すことも予想しながら立てなければいけないので、もし飛出すと予想されたならば、計画の中にその防止工作も入れておいて然るべきであり、それがしてないというのは、厳密な意味において正しい教育計画ではなかったということにならないでしょうか。よく研究発表などで、実に根気よく永続的な観察記録をなざっているようなものを拝見しますが、拝見する側では、それをなにか逸話的なものとしてすらっと読み流してしまい、折角の御苦労が単に、よくおやりになったで終ってしまうようなものがありますが、ああしたもののが、もっと与えられた条件別のことばでいえば、働きかけの順序、かたちと照らし合わされて出ておりますかと思っております。

さいごに私どもが克服しなければならぬものとして、前のこ

ととも関連しますが、子どもの中に芽生えたもの、形成されたものを見出したならば、それを強化していく努力を途中で放棄するよくなことです。これは保育者の根気強きとも関係しますが、たしかにそれもありましょうが、幼児の教育は、すべての面における良い習慣の形成であり、そのことは幼児の脳髓の中に一旦形成された路を、しばしば用いることによって、一時的なものから恒久的なものにすることだという根本的な問題に、いつも立戻って考えることが出来るようになりますと、この際はどうしても、この事をやらせなくてはならないという必然的なやり方が出てくるのです。おや、この子は変だぞ、こんな事でも出来るようになったことが、消えてなくなり、路がそれになってしまうと思うようなふしがあつたならば、そうさせないように手当をしなくてはならないのです。このこつがなかなかむずかしいので、見すごしたり、手当をしないでおいりするのです、またもう一度やり直しをしなければならぬことになります。それでは、いたずらに労多くして効少なしということになります。いつも細心の注意をはらっていて、その時の状況に応じて、一旦形成されたものを温く守り育て、その中から更に新しい、よりよいものを形成してやるようになり、ほんとは個性に根ざした、個々にいき届いた教育を望むことが出来ないでしょう。

(熊本商大付属敬愛幼稚園)